雄物川郷土資料館　令和６年度　第４回特別展
令和６年度　第３回あきた埋文出張展示

古代城柵・払田柵と横手盆地の集落遺跡

開催期間
2025 **1.25（土）〉3.16（日）**

入館料
大人１００円（８０円）
高校・大学生５０円（４０円）
中学生以下無料
※（）内は 15 名以上の団体料金

ギャラリートーク
3.1（土）
10:00-10:45

雄物川郷土資料館

9:00−17:00　（入館は 16:30 まで）
月曜休館　（月曜日が祝日の場合は翌日休館）

主　催　横手市教育委員会教育総務部文化財保護課
雄物川郷土資料館
車　横手北ＩＣ（ＥＴＣ専用）より１５分
横手ＩＣより２０分
大曲ＩＣより３０分
バス　横手バスターミナル発
本荘線新道角下車、徒歩１５分

協　力　秋田県埋蔵文化財センター　払田柵跡調査事務所

お問い合わせ：雄物川郷土資料館　〒013-0208　横手市雄物川町字沼館字高畑 366　TEL：0182-22-2793　FAX：0182-22-2807

開催にあたって

この度、皆様にご紹介するのは、長年にわたる発掘調査によって明らかになった、横手盆地の古代の姿です。横手市教育委員会による横手市内の古代集落遺跡の調査と、今年設立５０周年を迎えた秋田県教育庁払田柵跡調査事務所による払田柵跡の調査研究は、私たちの地域の歴史解明に大きな足跡を残してきました。

出土した貴重な遺物や最新の研究成果を通して、横手盆地の古代の文化や人々の暮らしに想いをめぐらせ、郷土への愛着を一層深めていただければ幸いです。

払田柵跡とは

秋田県大仙市にある払田柵跡は、東北地方最大級の古代城柵で、平安時代に造られました。丸子川と矢島川に挟まれた沖積地にあり、長森と真山という２つの丘陵を取り込んだ広大な敷地を持っています。この遺跡は、当時の名前が不明で、「第二次雄勝城」説や「河辺府」説などがあります。

払田柵跡は、古代の東北地方の対蝦夷拠点として重要な役割を果たしており、他の城柵と陸路で結ばれていました。昭和６年には国の史跡に指定され、国内で木簡というものが初めて認識された遺跡としても有名です。現在も発掘調査が続けられていますが、その全貌はまだ解明されていません。

左：木簡第 4･5 号
右：木簡第 33 号

9 世紀前半の様子

払田柵跡は、三重の囲いを持つ複雑な構造でした。長森と真山を囲む外柵は材木塀で造られ、南門西側の河川付近は最初から開口部がありました。政庁のある長森を囲む外郭線は、南側が築地塀、北側が材木塀で造られていました。正面の外郭南門には両脇に石塁があり、その上には櫓が設置され、外柵南門までの直線は南大路で結ばれていたと推定されます。

渦巻文様の瓦

9 世紀後半の様子

払田柵跡は、９世紀中頃に外柵が放棄され、柵で囲われた範囲が大幅に縮小しました。これにより、二重の構造へと変化し、真山は囲いの外となりました。また、外郭線の南側の築地塀は、材木塀に建て替えられました。その後、払田柵跡は終末期までこの二重構造を維持しました。長森では鍛冶作業が活発化し、墨書土器や漆紙文書といった文字資料、硯等の文具も多く出土しました。

墨書土器「厨」

9 世紀末～ 10 世紀前半の様子

９世紀末頃から、払田柵跡は大改修期に入ります。新しい建物が建てられ、より荘厳な姿へ建て替えも行われました。外郭南門周辺では、盛土や大溝が造られました。政庁や実務官衙域が最大規模となり、鍛冶作業が引き続き行われるほか、今まで以上に儀式や政務が執り行われるようになったと考えられます。

二面硯

10 世紀後半の様子

10世紀後半、払田柵跡は終末期に入ります。利用は大幅に縮小され、外郭南門周辺の盛土や大溝は河川の洪水による堆積層に覆われていきます。払田柵跡がなぜ放棄されたのか、その理由は律令国家の衰退と関わりがあると考えられますが、200 年近く続いたこの大規模な城柵が役割を終えた詳細な経緯については、今後さらなる研究が必要です。

政庁第Ⅴ期の土器

横手市内の集落遺跡

払田柵が造られ、行政・軍事的拠点として機能した９世紀代は、横手盆地に集落遺跡が最も多く営まれた時代です。平安時代には「平鹿郡大井郷」の範囲とされ、横手市西側を北流する大宮川流域は、平安時代の集落遺跡の発掘調査が近年数多く行われ、調査研究が著しく進みました。この流域に営まれた集落は払田柵などの城柵や官衙と関連を持ち、農耕に加え土器・漆器生産、小鍛冶などが生業とされたことがわかり、古代の人々の生活の実態が明らかになっています。

墨書土器「氏長」
（西小泉遺跡出土）